

野鳥たより

—北海道—

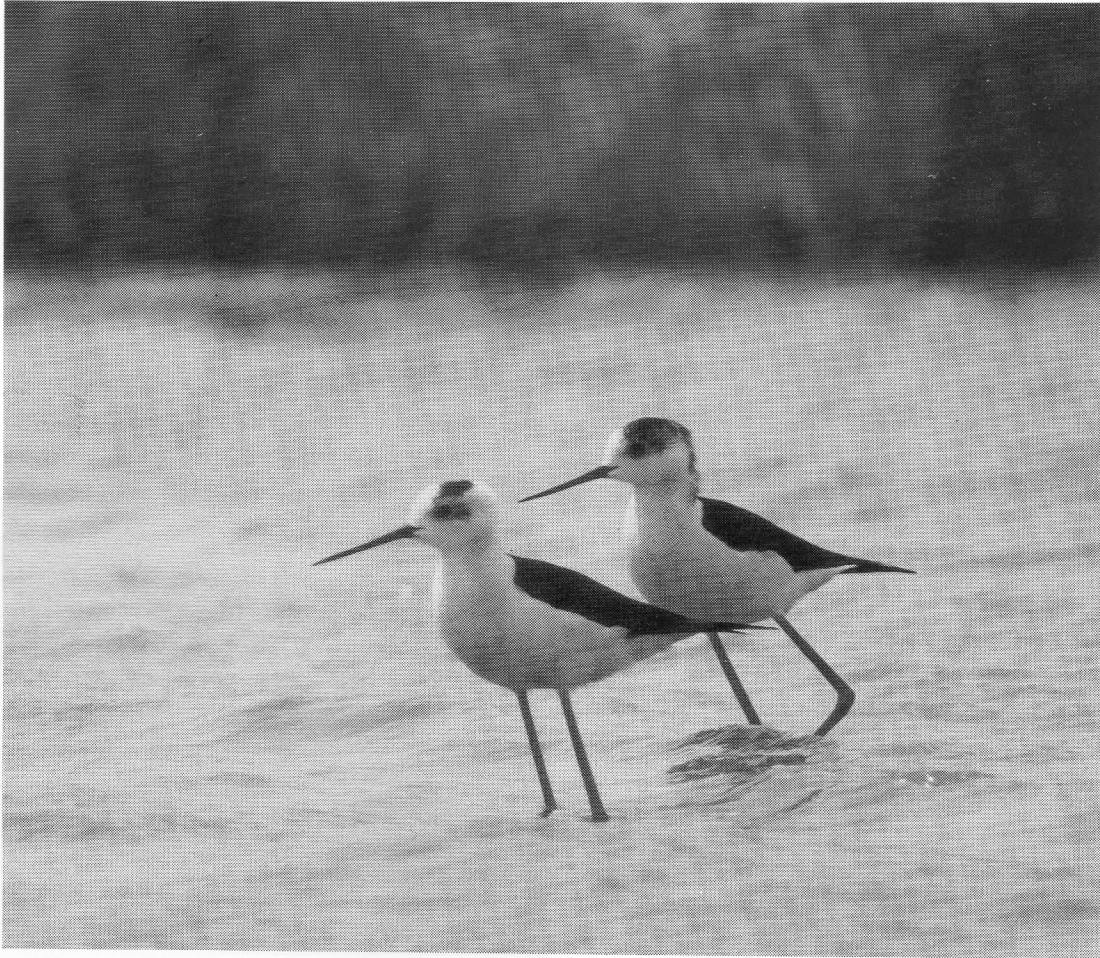
ISSN 0910-2396

第 116 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成11年6月21日

セイタカシギ



1998. 5. 12 江別石狩川 撮影者 野田 紘 幸

〒004-0805 札幌市清田区里塚緑ヶ丘9丁目9-3



も く じ

十勝地方の雁	越智 仁司	2
円山周辺野鳥の変遷	山田 甚一	4
傷病鳥獣保護ネットワークシステムの概要について	梶村 幸司	7
平成11年度総会報告		10
オオチドリとクロジョウビタキ	梅木 賢俊	12
鳥民だより		13
探鳥会ほうこく		14
探鳥会案内		16

十 勝 地 方 の 雁

越 智 仁 司 (浦幌野鳥倶楽部)

北海道は、ごく少数の越冬例を除き、雁の渡りの中継地となっていて、宮島沼やウトナイ湖には毎年春と秋に万単位の雁が訪れることはよく知られている。これほど多くはないが、十勝地方にも海岸沿いの湖沼群や十勝川下流部の一带に雁が定期的に訪れ、特にヒシクイでは重要な渡りのルートになっている。そこで、今年十周年を迎える「浦幌野鳥倶楽部」の会員の観察記録を主として、十勝地方の雁について紹介する。

十勝地方で見られる雁

『北海道地域別鳥類リスト』（日本野鳥の会北海道ブロック支部連合協議会、1991）には十勝で観察された雁として、シジュウカラガン、コクガン、マガン、ヒシクイ、ハクガン、サカツラガンの6種があげられているが、最近少数ながらカリガネも見られるようになった。この他にインドガンの記録があるが、『フィールドガイド日本の野鳥』増補版（高野伸二、1994）に、1984年5月に帯広市内で観察されたと思われるもの、迷鳥なのか、いわゆる“籠抜け”なのか、詳細不明である。

1) シジュウカラガン

稀に飛来し、最近では93年4月に豊頃町と大樹町で2羽が、97年3月から4月に豊頃町、浦幌町と大樹町で1羽が会員により観察されている。我々は「日本雁を保護する会」にならって、種としてはカナダガン (*Branta canadensis*) と呼んでいるが、十勝で観察された全てが亜種シジュウカラガン (*B. c. leucopareia*) かどうかは自信がない。いずれもマガンの群れの中にいた。

2) コクガン

風連湖や函館湾では多いようだが、十勝ではこれも稀にしか見られない。会員の記録では92年12月に十勝川河口で、96年1月には浦幌町の厚内漁港で、それぞれ1羽

が観察されている。96年1月には上空を飛んでいたという情報もあり、観察を続けているが、残念ながらその後は記録されていない。

3) マガン

以前は、大樹町の生花苗沼とその周辺の農地で毎春千羽を越える群が観察される一方、十勝川下流部ではヒシクイが圧倒的に多くてマガンは数百羽程度であったのが、最近ではどちらの飛来数もかなり増えている。日本で越冬するマガンが近年激増しているのと同じ理由によると思われるが、十勝川下流域でも90年頃は300羽ほどであった秋期の飛来数が最近では千羽を越えている。(生花苗沼は禁猟区になっていないため、秋には雁はほとんどいない) 春期には合わせて数千羽になっているものと思われる

4) カリガネ

会員の記録では96年11月に浦幌町で、97年3月と99年3月に豊頃町で、いずれも1羽が観察されている。95年頃「十勝にカリガネが7羽」という情報もあったが、浦幌野鳥倶楽部としては確認していない。マガンと行動を



牧草地で採食と休息をするオオヒシクイの群

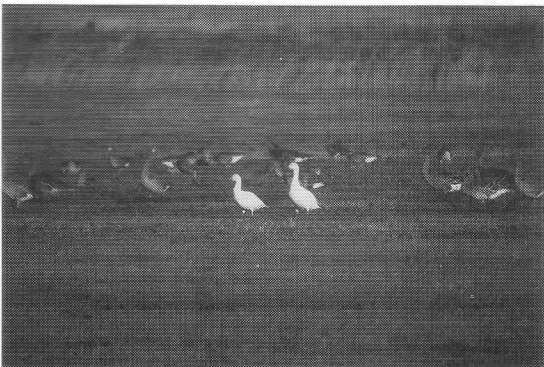
共にしているので、最近飛来数の増加しているマガンの群を丹念に探せば、観察数が増えると思われる。

5) ヒシクイ

十勝の雁のメイン。最近マガンが勢力を伸ばしてきているが、我々にとっては雁といえやはりヒシクイである。亜種オオヒシクイがほとんどで、亜種ヒシクイは極めて稀。「日本雁を保護する会」が渡りのルートを調べるために装着した、赤い首輪をつけた個体は最近少なくなってきたが、昨年黄色い首輪と衛星で追跡するための発信器を着けたオオヒシクイが登場して、我々を楽しませてくれている。ヒシクイの飛来数は春も秋も3,000から4,500くらいでほぼ一定している。95年の秋に「十勝のヒシクイが7,000羽」という新聞報道があり、雑誌『バーダー』でも引用されているが、この時も我々の観察では4,000あった。一部が長節湖や湧洞沼に入るが、生花苗沼では稀で、池田町のキモントー沼から河口部までの十勝川流域で見られることが多い。

6) ハクガン

91年3月から4月にかけて浦幌町と豊頃町で会員により観察された1羽が、十勝地方での初記録のようである。94年秋には幼鳥2羽が飛来し、以後は毎シーズン1羽から5羽が観察されている。95年秋から飛来している成鳥の中の1羽は、特に飛んでいるときに他のハクガンと比較するとかなり大きく、亜種オオハクガンではないかといわれている。しかし、我々はF. C. Bellroseの名著『北米のカモ、ガン、ハクチョウ』にある“野外では両亜種は事実上区別不可能である”という記載を信じて、



1995年秋に飛来したハクガン
大きい1羽(右)はオオハクガンの可能性がある

断定を保留している。97年秋には成鳥1羽と幼鳥3羽の家族と思われるグループの中に足輪を付けた幼鳥が1羽見られた。標識記号から、ハクガンの繁殖地として知られるウランゲル島で、ロシアの研究者によってこの年に標識された雛たちのうちの1羽であることが判明した。この4羽は翌年春にも観察されたが、残念ながらその後は飛来していないようである。

7) サカツラガン

記録の少ない雁であるが、91年4月に豊頃町で1羽が会員により観察された。最近96年秋からはほぼ毎シーズン1羽が、オオヒシクイの群の中で観察されていて、同じ個体ではないかと思われる。

探鳥案内

秋は例年9月10日前後に、繁殖地からの第1陣が到着する。この時期はまだ農作業が盛んな頃であるから、農地に囲まれた沼よりも、川で採食したり畔にすることがあるが、徐々に収穫の終わった畑に入るようになる。長節湖や湧洞沼にすることもありますが、ほぼ国道38号より下流の十勝川左岸の豊頃町、浦幌町にいますので見やすい。先にも書いたが、大樹町の生花苗沼は禁猟区になっていないため、10月1日からはハンターがたくさんいるが雁はいないので、近づかない方が無難である。ピークは10月下旬で、オオヒシクイ3,000羽とマガン数百羽が見られるであろう。11月下旬にはほぼすべてが越冬地へ去ってしまう。

春は非常に広範囲に分布するので、探すのが大変である。3月の初めに越冬地から飛来するが、この時には主な沼はまだ氷に覆われているし、農地にも雪が残っていることが多い。少しでも雪の少ないところを目指して、帯広市のすぐ近くの幕別町の農地にいることもある。雪解けとともに次第に下流へ向かうが、豊頃町統内や育素多に残るものもある。4月にはほぼ秋と同じところになるようになるが、農作業が始まるころに沼の氷が解けると、池田町のキモントー沼でもかなりの数が観察される。しかし、これは北帰行の途中と考えた方がよいのかも知れない。生花苗沼が開くのは比較的遅いが、4月半ばには沼と付近の農地に3,000羽以上のマガンが見られるようになり、よく探すとカリガネやシジュウカラガンもいるかも知れない。ピークは4月上旬で、5月の連休までには全て繁殖地へ向かってしまう。

以上、簡単に十勝で雁を見られるところを紹介したが、池田キモントー沼から河口までは直線距離で約25km、生花苗沼から同じく十勝川河口までも約25kmあり、この間を探し回するには自家用車が必須である。また、この広い中には探鳥ポイントがたくさんあって、すべては紹介できない。ヒシクイやマガンは道央の方が多いので珍しくはないと思うが、ハクガンはまず確実に見ていただければいいからお勧めである。十勝で雁を見たいと思う方は、ご連絡いただければ私がお案内するか、または私よりもっと詳しい会員を紹介できると思う。最後に、連絡先を兼ねて「十勝地方の雁」のページを紹介しておく。(更新が遅れ気味なのはご容赦を)

<http://www.netbeet.ne.jp/~anser/index.html>
〒089-0533 中川郡幕別町札内新北町4-1

円山周辺野鳥の変遷

山田 甚一

平成元年から10年目の区切に、円山公園周辺の鳥事情を私なりにまとめてみました。円山周辺の地域環境は10年前にはまだ樹齢100年といった老木もあったように思いますが、風倒木とか伐採で、森の中は疎林化した感があり、小川も護岸工事を施して自然さを失い、野草も開発事業等の影響でハゲ野といった個所が増えてしまったようです。公園内は花壇、子供遊具施設、休み所の設置等により、人の出入が増え、野生動物にとっては棲みづらい環境になりつつあると思います。夏の象徴であるセミの鳴き声も最近あまり聞かれなくなったり、蚊や蜂に刺されることは昔ほどなく、鳥の餌となる虫類の減少を痛切に感じます。このような環境の変化のもとに、野鳥の棲息状況を別表にしてみました。なお、種の配列は『日本産鳥類リスト』（日本鳥学会1997）に従いました。

円山周辺とは、大倉山、ユースホテル、円山公園一帯をいいます。表中の数値は出会率で、年間探索回数中に出会えた回数の割合（%）を示しています。特に記録の少ないものについては、記事の欄に観察年月日と場所を記入しておきました。

10年間で確認した野鳥は103種となり、あえて分けてみますと、留鳥47%、夏鳥32%、冬鳥16%、旅鳥4%、迷鳥1%です。個体数の多寡は出会率には関係しないの

で、表中の出会い率からは読み取れませんが、長年探索を続けていますと、個体数などについて以下のような感があります。

- 減少傾向にあるもの：センダイムシクイ、キクイタダキ、キバシリ、エナガ、ホオジロ、ウソ、シメ、ミソサザイ、ヤブサメ、アオバト
- 年により変動のあるもの：オオルリ、メジロ、アトリ、マヒワ、キレンジャク、ヒレンジャク
- 最近ほとんど見られないもの：ギンザンマシコ、イスカ、アカショウビン、クロジ
- 一時的に賑わしたもの：亜種ベニバラウソ、カワガラス、カワセミ、ゴイサギ

増減の理由は種々考えられますが、自然環境の変化と一口に言いきれなく、世界的にどうなのかいつも頭の片隅で載っている問題の一つです。我々にできることは、自然破壊をくい止め、子孫によい環境を残すよう努力するしかなく、小さいことではあるが、山野に行ったら、持っていったものは必ず持ち帰り、持っていないものは持ち帰らないという小さな心遣いから、明るい自然の存続を願うものです。

〒064-0822 札幌市中央区北2条西26丁目1-12

最近10年間円山周辺野鳥出会率（%）と推移

鳥名	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7	平8	平9	平10	記事
ゴイサギ	0	0	0	0	0	0	21	10	21	22	
アオサギ	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	H8・5/23他、大倉山
オシドリ	0	13	3	4	39	46	59	62	61	50	
マガモ	50	84	57	49	63	64	68	74	72	71	
カルガモ	27	61	2	3	30	7	8	11	11	4	
コガモ	1	1	1	0	1	0	1	0	2	1	
トモエガモ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	H5・9/19、円山池
オナガガモ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	H5・9/19、円山池
トビ	7	1	4	5	6	3	2	7	4	6	
オオタカ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	H8・5/5、88ヶ所山頂
ツミ	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	H6・2/19、H9・4/26、88ヶ所山頂
ハイタカ	5	3	4	5	2	7	6	7	5	6	
ノスリ	3	0	1	0	1	0	1	1	0	1	
ハヤブサ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	H3・11/1、荒井山
チゴハヤブサ	0	10	22	12	2	1	1	6	6	2	

鳥名	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7	平8	平9	平10	記 事
チョウゲンボウ	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	H2・10/31、H5・11/6、荒井山
キジ	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	H1・3/21他、彫刻美術館の森
キジバト	44	44	54	43	34	45	42	37	45	43	
アオバト	19	8	16	3	1	11	9	7	9	4	
ジュウイチ	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	H9・6/7、H9・6/12、神社山
カッコウ	1	1	1	0	0	0	0	2	0	1	
ツツドリ	2	1	1	1	1	7	3	3	0	3	
コノハズク	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	H3・7/8、神社山
ヨタカ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	H3・2/7、神社山
ハリオアマツバメ	2	2	3	2	1	2	3	2	1	0	
アマツバメ	1	0	0	2	0	1	1	1	1	0	
アカショウビン	0	1	3	3	1	0	0	0	1	0	
カワセミ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	H9・4/20他、H10・7/29他、円山池
ヤマゲラ	16	22	29	26	15	11	23	25	14	20	
クマゲラ	0	0	0	1	1	0	1	2	3	1	
アカゲラ	79	78	84	84	76	79	76	73	77	71	
オオアカゲラ	6	3	5	6	5	4	5	2	2	3	
コアカゲラ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	H4・5/22、円山公園
コゲラ	60	66	73	79	79	67	73	67	63	60	
ショウドウツバメ	4	0	1	0	0	1	0	0	0	0	H6・5/8、円山競技場
イワツバメ	1	3	3	1	3	2	0	11	22	18	
キセキレイ	23	29	35	31	18	43	37	32	35	27	
ハクセキレイ	17	29	26	38	40	39	44	40	38	27	
セグロセキレイ	4	1	0	0	1	0	0	0	0	1	H10・8/27、動物園裏排水溝
ビンズイ	7	0	0	2	2	4	0	5	2	0	
ヒヨドリ	98	98	99	99	99	100	100	100	100	100	
モズ	21	29	27	23	6	27	24	24	15	36	
キレンジャク	3	0	4	0	15	0	1	4	12	0	
ヒレンジャク	0	0	7	0	14	1	1	1	0	1	
カワガラス	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1	H10・11/24、動物園裏排水溝
ミソサザイ	8	5	4	8	9	8	2	2	4	0	
コマドリ	0	1	0	1	1	2	1	1	0	1	
ノゴマ	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	H8・5/18、彫刻美術館森
コルリ	9	10	10	6	8	19	18	17	19	14	
ルリビタキ	1	1	1	1	3	3	0	1	0	1	
トラツグミ	10	6	13	20	5	14	11	5	5	2	
マミジロ	0	0	2	0	1	0	0	0	2	1	
クロツグミ	15	14	35	20	14	32	25	22	30	20	
アカハラ	8	17	6	12	6	20	6	15	13	22	
シロハラ	0	0	1	0	0	6	2	1	0	0	
マミチャジナイ	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	H8・5/19、円山公園
ツグミ	11	42	28	36	33	37	39	32	29	32	
ヤブサメ	21	25	22	21	24	28	24	28	36	20	
ウグイス	14	12	9	15	15	17	9	30	15	28	
エゾセンニュウ	0	1	2	0	0	1	1	2	3	3	

鳥名	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7	平8	平9	平10	記事
シマセンニュウ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	H6・6/4他、大倉山
マキノセンニュウ	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	H6・6/11他、H9・6/3、大倉山
メボソムシクイ	11	6	9	4	6	9	8	13	12	8	
エゾムシクイ	0	0	0	2	1	3	2	3	5	3	
センダイムシクイ	5	3	5	9	7	11	10	16	10	8	
クイタダキ	2	6	9	1	6	4	1	9	5	3	
キビタキ	20	19	30	19	24	29	22	24	28	24	
ムギマキ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	H6・5/17、H8・5/28、ユースの森
オオルリ	13	14	15	16	16	27	21	19	26	17	
サメビタキ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	H8・5/28、円山公園池辺
コサメビタキ	4	2	3	0	1	2	2	4	2	1	
エナガ(シマエナガ)	6	9	16	19	16	19	17	17	8	11	
ハシブトガラ	91	94	98	100	100	100	100	99	100	100	
ヒガラ	33	36	65	68	61	50	62	54	62	44	
ヤマガラ	58	71	95	96	82	86	86	87	86	86	
シジュウカラ	98	97	100	100	98	99	99	98	96	100	
ゴジュウカラ	70	78	75	88	91	91	91	89	86	95	
キバシリ	4	3	4	1	4	2	1	1	1	0	
メジロ	7	4	1	10	10	17	6	28	5	11	
ホオジロ	30	18	30	27	17	34	28	19	35	3	
ホオアカ	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	H2・6/12他、大倉山
カシラダカ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	H3・11/1、大倉山
アオジ	49	47	51	33	31	45	34	45	43	34	
クロジ	2	0	0	0	0	4	1	1	0	0	
アトリ	4	6	1	1	19	13	14	3	0	9	
カワラヒワ	71	58	76	71	77	68	84	78	72	81	
マヒワ	9	1	16	20	13	10	6	16	1	11	
ベニヒワ	3	0	0	0	0	0	0	1	2	2	
ハギマシコ	0	0	0	0	0	1	1	6	2	0	
ギンザンマシコ	0	0	1	5	0	1	0	0	0	0	H6・11/12、円山公園
イスカ	0	0	6	1	2	0	1	0	0	0	
ナキイスカ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	H3・5/22、ユースの森
ベニマシコ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	H2・10/20、H10・5/12、大倉山
ウソ	2	6	7	11	1	5	13	17	10	12	
イカル	15	13	18	8	7	17	8	0	8	9	
シメ	14	11	39	49	35	22	37	33	42	18	
ニュウナイズメ	2	2	1	1	0	0	1	4	1	0	
ズメ	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
コムクドリ	2	6	1	0	1	0	25	0	0	0	
ムクドリ	3	1	5	12	23	28	0	12	11	14	
カケス(ミヤマカケス)	20	30	34	37	20	16	29	29	15	27	
ハシボソガラス	100	100	100	100	100	100	100	100	100	99	
ハシブトガラス	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
年間記録種数	67	69	74	66	71	72	68	76	69	67	
年間探索回数	98	157	171	105	148	183	194	161	130	151	

傷病鳥獣保護ネットワークシステムの概要について

幌村 幸司（北海道環境生活部環境室自然環境課）

【はじめに】

現在、北海道が関係機関や皆様方の協力を得て実施しています「傷病鳥獣保護ネットワークシステム」の概要を紹介します。

この「傷病鳥獣」の発生原因等は、人間の活動によるもの、全くの自然状態で発生したと推測されるもの、また、毎年春先に多発してしまう傾向のある幼鳥獣の強制保護など種々ありますが、北海道（庁）で把握している数は、毎年約2千数百件にのぼっています。

この問題解決の一助として、北海道が平成9年度より実施しております事業が、「傷病鳥獣保護ネットワークシステム」です。

【傷病鳥獣保護ネットワークシステム】

私たちの北海道には、豊かな自然にはぐくまれた多くの野生鳥獣が生息しています。

しかし、事故等により傷つき又は病気にかかって保護される野生鳥獣が増加しています。

このような傷病鳥獣に対して、道では適切な治療を行い、自然に復帰させることにより、野生鳥獣の保護及び道民の鳥獣保護思想の普及啓発を図ることを目的として、市町村や道獣医師会、公立動物園、その他協力機関（団体やボランティア等）の協力のもと、平成9年度に「傷病鳥獣保護ネットワークシステム」を発足させています。

この制度では、発見された傷病鳥獣で治療を必要とするものについては、まず指定診療施設で応急手当等を行い、このうち回復までに時間を要するものについては、公立動物園等で保護することになっています。

なお、これらの治療や保護に要した費用は、道の予算の範囲内で負担しています。

【傷病鳥獣の範囲】

ケガや病気等で弱っている野生の鳥獣を傷病鳥獣といえます。

野生の鳥獣とは、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」の対象となる野生の鳥や獣をいい、次のものは該当しません。

- (1) 家畜やペット（レース鳩・伝書鳩含む）
- (2) アザラシなどの海獣類（鳥獣法適用外）

(3) ネズミ及びモグラ（鳥獣法適用外）、ヘビ等（両生類、は虫類）

(4) ノライヌ、ノラネコ

なお、昆虫や魚貝類も含まれません。

また、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」の対象となっている野生の鳥や獣でも、ヒナや幼獣（けもの子供）の場合は、親が近くにいることが多いため、特に外傷や衰弱が見られない場合はそのままにしておいてください。

【対象となる鳥獣】

この制度で対象としている鳥獣は、北海道に生息する在来の野生鳥類及び哺乳類（海獣類を除く）で、傷つき又は病気にかかって自力で生息できないものです。

ただし、人間に感染するおそれのある疾病にかかっている可能性のある鳥獣については、対象としないことができます。

【傷病鳥獣保護ネットワークシステムフロー】

傷病鳥獣が発見されたり保護された場合、傷病鳥獣保護ネットワークシステムにより鳥獣の治療を行うこととなりますが、この場合いろいろなケースが考えられます。

たとえば、支庁、市町村、警察などの機関に住民から通報・持ち込みがなされる場合や、直接指定診療施設に持ち込まれる場合など、さまざまなケースが考えられ、おきています。

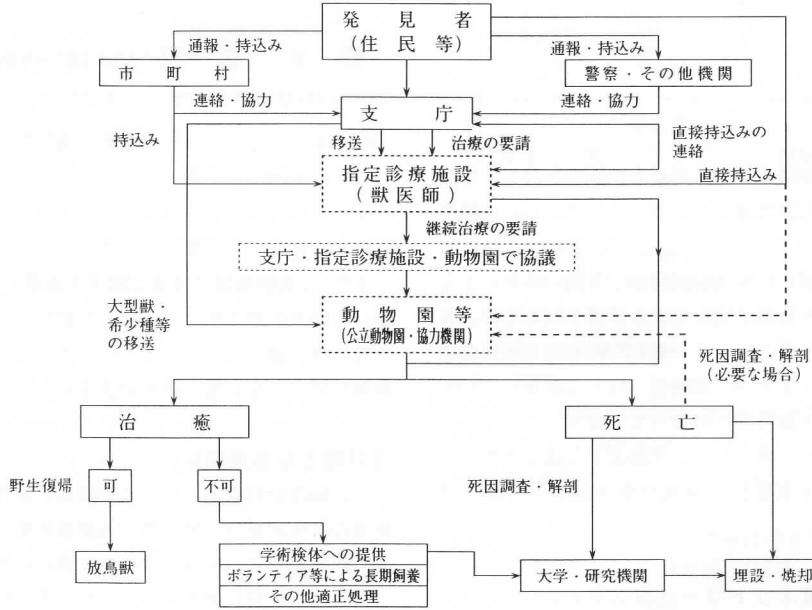
そこで、傷病鳥獣の発見から治療、保護までの流れを示したのが「図1」です。

このネットワークシステムでは、初期的な治療を担当する1次収容機関と長期の治療や希少種の治療を担当する2次収容機関がありますが、支庁の自然環境係がネットワークの中核となり、連絡調整や移送の指示・実施、中長期収容個体の収容方法等の検討・指示を行うことで、特定機関に負担を集中等させずに、専門性を生かしながら、機動的かつ相互補完的に傷病鳥獣を保護収容等しようとするものです。

また、「傷病鳥獣の119番」のリーフレットを作成配布し、一般への理解と協力を求め、ネットワークシステムの円滑的推進と不要な保護収容の抑止を普及啓発しています。「図2」

「図1」

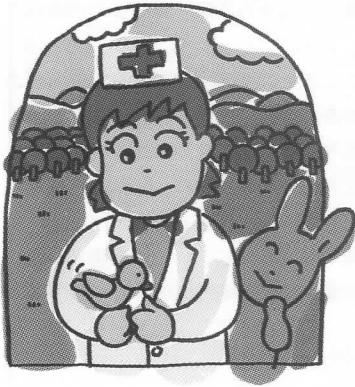
傷病鳥獣保護ネットワークシステムフロー図



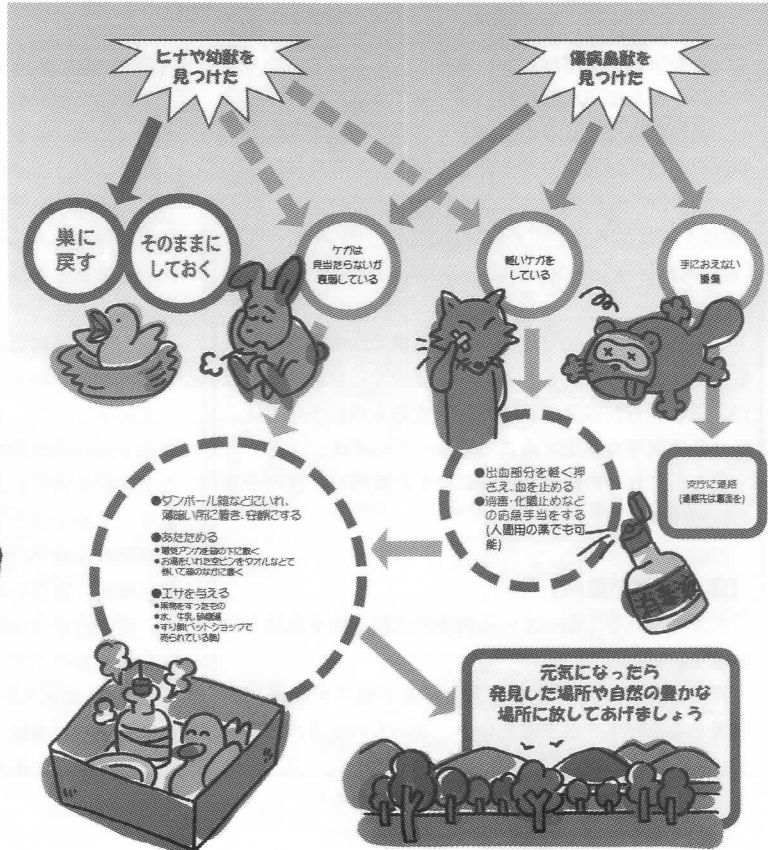
「図2」

しょうびょう ちょうじゅう
**傷病鳥獣
の119番**

～ケガをした鳥やけものを見つけたら～



北海道環境生活部環境室自然環境課



【傷病鳥獣を巡るいろいろなこと】

よく、幅が広いと言われる自然環境関係の業務でも、傷病鳥獣だけでもいろいろとあります。

また、生体の場合には、捕獲作業が伴いますが、これなどは職種的には、漁業の採捕作業に近く、親方の号令での以心伝心の目で語り合う連係プレー、鳥獣の心理を察知した状況判断や問合い、長時間作業の体力や忍耐が要求され、狩猟者達がよく言う気力・知力・体力そのものです。

これは一朝一夕には身に付かず、場数を踏んでなんとなくできるようになる、言わば企業や組織で行うOJT(On the Job Training)と同様ですが、よく手伝いをお願いしたベテランの狩猟者達はこの点が絶妙で、おそらく共同狩猟行為の中で体得したと思われるが、生体捕獲の指揮、実行、補助等の役割分担がとてもうまく、端で見ていることしかできなかった我々自身も、非常に勉強させられました。

このケースでは、傷病鳥獣は文字通り傷つき病んでいるため、すでに発見者に捕獲されているか生体捕獲でも瞬時か、せいぜい数回のトライで済んでしまうのが通例ですが、最近あったものでは、連続1ヶ月以上におよぶ捕獲作業の事例が報告されています。

この件では、生体の捕獲の場合は、漁業の採捕作業に近いと先述しましたが、ごく短い時間のものでも楽ではないのに、1ヶ月以上となると関係職員の疲労困憊も相当であったと推定されます。

また、傷病鳥獣はしばしば騒ぎとなってしまいます。

これは、傷病鳥獣自身が原因ではなく、むしろ過剰反応等する人間の問題ではないかと思っています。

傷病鳥獣を巡るいろいろなことを紹介します。

●一般行政事務との乖離

稟議制等の意志決定行為不在のままに、事務担当者のレベルで判断で即応せざるを得ない状況や災害や事故対応のような警察や消防レベル緊急対応を訴求されるなど、一般行政事務とのギャップが大きく、内部でも議論のあるところです。

●生体の捕獲作業

私的経験では、生体の捕獲は一気呵成でやってしまうとスムーズですが、一度失敗すると対象鳥獣が警戒等し膠着状態となることもありました。

また、捕獲行為の際に、タモ網等の捕獲道具等とその駆使技術も必要ですが、これも日々訓練などする時間もないので、泥縄ではありますが、現場で初めて使ったとか、やったらできたなどのケースが多いところです。

生体捕獲作業現場では職員等の習熟度に応じた、指揮、

実行、連絡調整、補助の役割分担が必要ですが、共同採取作業に不慣れなため、指揮不在のまま、皆で追いかけてしまい、先述のベテランのハンターさんにお叱りを受けたりもしました。

●対応の不要の状況、過剰保護収容の要請

鳥獣を擬人化・擬ペット化視して、存在等しているだけで、保護収容の要請等される場合があります。

また、自然死した個体は、本来であれば放置し生態系の消費者や分解者の処理(後述)に任せるべきですが、当方も死因が特定できていない場合、違法性の判断のこともあり対応せざるを得ない場合があります。

生態系で一般に生き物は「生産者」「消費者」「分解者」三大別されますが、「消費者」である鳥獣が死亡した場合は、この鳥獣の死体を糧とする生き物の存在を忘れてはなりません。

つまり、自然死した個体を安易に片づけてしまうことは、腐肉食性の生き物や分解者の餌を奪っていることにもなりかねません。

また、毎年春先に幼鳥獣の強制保護(又は非傷病個体の過剰保護収容)が見られ、やむを得ず引き取ってしまう場合がありますが、人間に保護収容された鳥獣は、将来、野外復帰や自活生活ができないものとなる不可逆的な問題なので、説明のうえ断る必要があります。

●要検討課題

過去データ分析による発生原因、救命率、放鳥獣後の生存率の分析、加療や収容期間の検討も必要となっています。

傷病鳥獣に起因する関係職員の負傷も見られるため、安全への配慮や過剰保護収容の要請等は、普及啓発や説得などにより抑止を徹底していくことが必要と考えております。

【最後に】

傷病鳥獣に関しては、失敗の事例を集積の蓄積が、むしろ今後の対応の指針となる状況であることや、また、海外の先進事例と比較してなのか、しばしば、非常に困難な要望等も見られます。

傷病鳥獣への対応はいずれの場合も関係者の密接な連携が必要です。

この「傷病鳥獣保護ネットワークシステム」を充実、推進させるため、関係者の皆様のご理解とご協力が不可欠ですので、どうぞよろしく申し上げます。

平成11年度総会報告

日 時：平成11年4月17日(土) 午後1時30分～4時30分
 場 所：札幌市民会館 第2号会議室
 谷口一芳会長の挨拶のあと、議長に小堀煌治氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決承認された。

<議 事>

1. 平成10年度事業報告

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
 開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
 開催期間：平成10年5月12日～5月24日
 出 展：12名、24点
- (2) 「野鳥だより」の発送(112号～115号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
 講 師 マーク・ブラジル氏「島の鳥たち」
 平成11年1月23日、札幌女性センター
 参加者：46名
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成
 100部(1部1,000円)
- (5) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)
- (6) 傷害保険の更新

[広 報]

「野鳥だより」112、113、114、115号の編集・発行
 [探 鳥]
 探鳥会 18回。参加者累計619名。(1回平均 34名)
 「野幌森林公園を歩きましょう」開催8回。
 参加者累200名。(1回平均 25名)

[会 計]

- (1) 平成10年度決算報告
- (2) 平成10年度会計監査報告。大野信明監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成11年度事業計画

[総 務]

- (1) 新年講演会の開催(平成12年1月中)
- (2) 野鳥写真展の開催
 開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
 開催期間：平成11年4月27日～5月16日
- (3) 愛護会設立30周年事業検討委員会の設置
- (4) 「野鳥だより」の発送(116号～119号)
- (5) 定例幹事会の開催
- (6) 愛護会名入りカレンダーの作成
- (7) 傷害保険の更新

平成10年度決算書

(収入の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
繰越金	259,802	259,802	0	
個人費	695,500	680,000	15,500	平成11年度以降の前受分を含む
家族費	111,000	90,000	21,000	平成11年度以降の前受分を含む
団体費	5,000	10,000	△ 5,000	建設維持管理センター
寄付金	1,000	5,000	△ 4,000	
参加費	33,500	60,000	△ 26,500	後援会、藤の沢探鳥会参加費
売上金	191,600	180,000	11,600	野鳥だより、カレンダー
雑収入	1,765	5,198	△ 3,433	利息
合 計	1,299,167	1,290,000	9,167	

(支出の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
印刷費	532,035	570,000	△ 37,965	野鳥だより(4回発行)、チェックリスト
通信費	141,740	200,000	△ 58,260	野鳥だより発送費ほか
会議費	49,200	80,000	△ 30,800	幹事会等の会議室使用料
消耗費	34,334	50,000	△ 15,666	封筒
交通費	53,000	70,000	△ 17,000	探鳥会等幹事交通費
報償費	87,000	90,000	△ 3,000	事務所・講師謝礼ほか
雑 費	56,296	70,000	△ 13,704	傷害保険料、写真展ほか
予備費	0	160,000	△ 160,000	
合 計	953,605	1,290,000	△ 336,395	

(収支の部)

(収入) (支出) (残高)
 1,299,167 - 953,605 = 345,562

内 訳 会費仮受分 124,000
 繰越金 221,562

[広 報]

「野鳥だより」116、117、118、119号の編集・発行

[探 鳥]

探鳥会 20回

「野幌森林公園を歩きましょう」7回

[会 計]

(1) 平成11年度予算(案)

[役員人事]

永らく会計幹事をつとめた大町欣子氏、霜村耕一氏が総務幹事となり、代わりにこれまで総務幹事だった蒲澤鉄太郎氏と清水朋子氏が会計幹事に就任した。また、探鳥幹事に佐藤幸典氏(岩見沢市)、浪田良三氏(江別市)、山下 茂(鶴川町)が、広報幹事に芹沢裕二氏(釧路市)、長谷川富昭氏(滝川市)が新たに変わった。

※会員数

項 目	9. 4. 1	10. 4. 1	11. 4. 1
個人会員数	370名	340名	330名
家族会員数	20家族	30家族	33家族
団体会員数	1団体	2団体	2団体

[平成11年度役員]

会 長 谷口 一芳

副 会 長 小堀 煌治、戸津 高保

監 事 大野 信明、村野 紀雄

会計幹事 蒲澤鉄太郎、清水 朋子

代表幹事 白澤 昌彦

幹 事

(総務)◎中正 憲佑、井上 公雄(兼)、大町 欣子

梶浦 孝純、蒲澤鉄太郎(兼)、霜村 耕一

早坂 泰夫、三船 幸子、渡辺紀久雄

(探鳥)◎井上 公雄、赤石 誠二、梅木 賢俊

栗林 宏三、後藤 義民、佐藤 幸典

竹内 強、戸津 高保(兼)、富川 徹

富田 寿一、永島 良郎、浪田 良三

野坂 英三、山下 茂、山田 良造

渡辺 俊夫

(広報)◎樋口 孝城、森田新一郎、伊東 裕二

栗林 宏三(兼) 佐藤ひろみ、白澤 昌彦(兼)

芹沢 裕二、竹内 強(兼) 武沢 和義

道場 優、長谷川富昭 道川富美子

(◎印各担当の代表者)

30周年記念事業特別会計

(10年度収入決算)

項 目	金 額	摘 要
寄 付 金	300,000円	柳澤様からの寄付金

(11年度収入予算)

項 目	金 額	摘 要
寄 付 金	300,000円	柳澤様からの寄付金

平成11年度予算書

(収入の部)

	前年度 予算額	予算額	摘 要
繰越金	259,802	221,562	会費前受分は会費に計上
個人会費	680,000	660,000	2,000×330人
家族会員	90,000	99,000	3,000×33家族
団体会費	10,000	10,000	5,000×2団体
寄付金	5,000	1,000	
参加費	60,000	60,000	後援会、藤の沢探鳥会 参加費
売上金	180,000	180,000	野鳥だより、カレンダー ネクタイピン
雑収入	5,198	1,438	利息ほか
合 計	1,290,000	1,233,000	

(支出の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
印刷費	57,000	570,000	野鳥だより(4回発行)
通信費	200,000	200,000	野鳥だより発送費ほか
会議費	80,000	70,000	幹事会等の会議室使用料
消耗品費	50,000	50,000	封筒、タックシールほか
交通費	70,000	70,000	探鳥会等幹事交通費
報償費	90,000	95,000	事務所・講師謝礼ほか
雑 費	70,000	70,000	傷害保険料、写真展ほか
予備費	160,000	108,000	
合 計	1,290,000	1,233,000	

オオチドリとクロジョウビタキ

梅木賢俊

1999年4月10日、余市町栄町（大浜中）の砂浜海岸でオオチドリとクロジョウビタキが、同一の場所で同時に観察されました。

4月10日、初めに発見されたのはオオチドリです。発見者は、余市町の山田忠重さん（日本野鳥の会小樽支部会員）です。山田さんは健康管理の一環としてウォーキングと野鳥観察を日課としており、当日8:45ころコチドリを撮影する目的で立ち寄った海岸でオオチドリを発見しました。

オオチドリ発見の情報は、その後、余市町在住の野鳥の会小樽支部会員荻野貴美子、志賀英子の皆さんへ伝えられました。荻野さんたちは、13:30ころ大浜中の海岸へ着き、しばらくオオチドリを観察していたところ、砂浜をよぎって沖合い数十メートルの消波ブロックへ飛ぶ鳥影を目撃しました。よく見ると、それはクロジョウビタキの雄だったのです。一度に2羽の珍鳥が出現したのです。



オオチドリ（冬羽タイプ）
1999. 4.11 余市町栄町（大浜中）

一方、私は14:00ころ連絡を受け、図鑑とカメラを用意して現地へ向かいました。14:50大浜中の海岸に着くと山田、荻野、志賀の皆さんが観察中でした。オオチドリはすぐに見つかりましたが、さらにクロジョウビタキもいることを教えられて驚きました。

オオチドリは芽吹いたばかりのテンキグサの生える砂浜で採餌していましたが、近寄るのは比較的容易でした。クロジョウビタキは融雪後の人家周辺の地面に頻繁に降りて採餌しているようでした。杭などによく止まり、ジョウビタキと同じように尾をブルブルと振りました。私たちが追いかけると人家の屋根や電線に止まったりもしま

した。動きは速く、近寄るのが困難なほどでした。

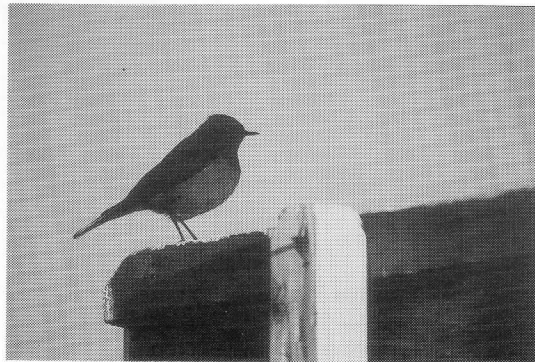
そして、初認の翌日の4月11日から4月13日にかけて数名の野鳥の会小樽支部会員が観察に行きましたが、終認は次のとおりです。

クロジョウビタキは4月11日17:40を最後に、4月12日以降は見られなくなりました。オオチドリは4月12日15:20ころは確認されましたが、4月13日以降は見ることができませんでした。

『日本動物大百科』第4巻鳥類Ⅱ（1997）によると「オオチドリは、日本ではまれな旅鳥。モンゴルから中国北部で繁殖し、インドネシア、オーストラリア北部へ渡って越冬する」と記載されています。山溪ハンデイ図鑑7『日本の野鳥』（1998）には「オオチドリは旅鳥で、2月から3月ころに多い。西日本での記録が多く、特に先島諸島には毎年渡来する」とあります。

近年の記録として北海道石狩1979年、本州（神奈川県1962年、愛知1971年、1973年、兵庫1973年）、九州（鹿児島1975年）、中部琉球（沖縄本島1973年）、南部琉球（宮古島1981年、与那国島1981年）などがあります。（『日本産鳥類図鑑』1992）したがって、今回の余市町におけるオオチドリの記録は、北海道で2例目とされます。

クロジョウビタキは、『日本動物大百科』第3巻鳥類Ⅰ（1996）によると「きわめてまれな迷鳥。ユーラシアの低・中緯度地方、ヨーロッパ中・南部、トルコ、中央アジア、バルハン湖周辺から天山山脈およびヒマラヤから中国西部山岳地帯に繁殖、冬は地中海周辺地域、東アフリカ、アラビア、インドなどへ渡る。6亜種が知られ、日本へ来るものは中国の亜種 *Phoenicurus ochruros rufiventris* とされる」と記載されています。『日本産鳥類リスト』（日本鳥学会目録編集委員会1997）においてもクロジョウビタキは、亜種 *P. o. rufiventris* を採用しています。



クロジョウビタキ（♂）
1999. 4.11 余市町栄町（大浜中）

クロジョウビタキの日本での記録は、1998年の積丹町

の記録に関連して、『北海道野鳥だより』No.113 (1998) にも「1984年以降石川県舩倉島、山口県見島、埼玉県などで数回記録されている」とあるほか、道内からの少数例があります。

北海道における記録(※注)は、①1986年4月25日、知床岬先端文吉湾で♂1羽 ②1998年5月11日～12日、積丹町来岸で1羽(性・年齢不明)の2例がありますので、今回の記録は3例目と思われます。

終わりになりますが、紙面をお借りして、オオチドリとクロジョウビタキの貴重な出現情報をいただいた余市町の山田忠重、荻野貴美子、志賀英子の皆さん、そしてこれまでの記録について教示いただいた羅臼町の田沢道広、積丹町の佐藤領江子の皆さんへ感謝申し上げます。

※注

北海道におけるクロジョウビタキの記録について、北海道地域別鳥類リスト(日本野鳥の会北海道ブロック支部連絡協議会 1991)では、根室地域の記録として高田勝 1991 根室支庁管内鳥類リスト(ワイルドライフレポート No.12 79-98)を引用し、同じく知床半島地域の記録として中川 元 1988 知床の動物群集3鳥類(知床の動物 59-121)、田沢道広 1990 知床半島羅臼町管内の鳥類リスト(知床博物館研究報告第11集 21-27)を引用しているが、三つの文献の記載内容は、すべて1986年4月25日知床岬先端部文吉湾上の林における1羽(♂)についてのもので、田沢ほかの観察記録に基づくものであり、出処は一つである。

鳥 民 だ よ り

会 員 名 簿

(平成11年5月31日現在)

【新しく会員になられた方】

(家) 雪田昭治・久子	☎ 592-0704	〒 005-0849	札幌市南区石山1条2丁目11-10
(家) 勝見輝夫・真知子	☎ 387-2085	〒 069-0853	江別市大麻高町30-13
村上 和子	☎ 561-7206	〒 064-0807	札幌市中央区南7条西26丁目2-12
中島 宏幸	☎ 781-8729	〒 065-0024	札幌市東区北24条東17丁目1-17
松本 幸也	☎ 884-3007	〒 004-0872	札幌市清田区平岡2条4丁目2-5
中村 茂	☎ 875-0874	〒 003-0862	札幌市白石区川北2条3丁目749-120
芹沢 裕二	☎ (0154) 36-2592	〒 085-0061	釧路市芦野2-22-17 ビレッジ芦野206
(家) 沢田静明・敦子	☎ 836-2536	〒 062-0052	札幌市豊平区月寒東2条18丁目1-1 クリーン・リバー南月寒703
逸見 トモ子	☎ (0123) 23-3330	〒 066-0047	千歳市本町2丁目29

【住所変更】

今村 三枝子		〒 003-0006	札幌市白石区東札幌6条3丁目1-2-2-311
河端 正晴	☎ 894-0028	〒 004-0073	札幌市厚別区北3条2丁目3-11
山本 昌子	☎ 685-5578	〒 006-0002	札幌市手稲区西宮の沢1条3丁目226-18
森田 崇司		〒 063-0035	札幌市西区西野5条7丁目9-8
坂元 直人		〒 063-0845	札幌市西区八軒5条西2丁目3-23-602
長岡 宏幸	☎ 644-5810	〒 063-0841	札幌市西区八軒1条西4丁目615-53
武田 忠義	☎ (0126) 25-7955	〒 068-0002	岩見沢市2条東1丁目8-1 パナハイツ今井101



円山公園探鳥会に 参加して

1999. 3. 7

河 邊 實

北国でもまれにみる程の猛吹雪に、終日とじ込められた翌朝、一転みごとに晴れ渡り、思わず外へ出て歩きたくなる。タイミングも良く、早朝、親戚の高橋さんからバードウォッチングのお誘いをいただき、家人は支度が間に合わぬと言うので、小生独り、冬の円山公園散策を主目的？に、急ごしらえの支度もそこそこに駆けつけることにした。

集合場所は聞いた通り、地下鉄円山公園駅から見当をつけて数分、すぐにそれらしい集団が見つかった。

高橋夫妻の顔も見えて間違いなし、思い思いの防寒具、足もとの備え、双眼鏡等それぞれスタイルもきまって、ベテラン揃いを思わせる50名位の中へ、鳥のこと等皆目無知な一員がまざれ込ませてもらい、単に運動不足を補うだけと言う、けしからぬ心掛けに、気がひけながらも、兎も角も出発した。

歩き始めて早々に「あっ！ヤマゲラだ。シジュウカラか？」等の声に立ち止まるが、小さい物体が忙しく動き回るものを目で追うのが精一杯。それにしても普段は全く気づかない鳥が思った以上に多く飛んでいるのにまず驚き、次はそれらを見つけ、名前迄見分けられる能力には、唯々感心するのみ。

聞けば、まず声と動きで見つけ、色や特徴で見分ける由。親切に望遠鏡で覗かせてもらったりで確かめはするが、聞いてもその時だけ、数分も歩くと名前も忘れてしまうので、帰って家人に「何を見て来たの？」とひやかされた時の備えに、聞いた名前だけでもと、メモをしながら歩くことにした。

ヤマゲラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、キレンジャク等々約10種。最後にリーダー氏の観察チェック数の半分近くも一応メモが出来て、まずは上出来。皆様のおかげでした。

昨夏退職、帰道して鳥類の住み家である山林が想像を超える速さで減ってしまった中で、野幌、西岡、円山等都心に近く、辛うじて残された樹林で、きびしい寒さに耐え、早春とは名ばかりの雪深い環境でこれだけの鳥が生き抜いていることに感慨を覚えた。

以前、市川市行徳に住んだ頃、近くに東京湾の最奥、現皇太子が雅子さまとデートに使われた宮内庁新浜鴨場

に隣接した新浜野鳥観測所があり、広大な干潟に去来する鴨の大群や、サギの姿等みごとであったが、今日の様にこちらから自然の中へ野鳥に会いに出向いて歩く趣向も又違った楽しさで、お天気にも恵まれ、帰りに寄ったソバの味も又格別であった。

〒062-0043 札幌市豊平区福住3条3丁目1-1

〔記録された鳥〕トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、マヒワ、ハギマシコ、ウソ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ドバト、シメ 以上22種

〔参加者〕谷口一芳、藤田 勝、山田良造、後藤義民、村上和子、今泉秀吉、横井澄子、佐々木潤子、橋爪陽子、倉田武男、山田甚一・れい子、佐々木友子、須田 節、小堀煌治、山下和子、亀垣睦子、今村三枝子、田端愛子、目黒貞子、板田孝弘、今村敏郎、小野省子、鈴木正江、松原寛直・敏子、村上、井上歌子、吉田雅子、西山礼子、鈴木繁雄・英子、武沢和義・佐和子、道場 優・信子、戸津高保、高橋利道・圭策子、金田信子、松原八重子、駒井 守、河邊 實、栗林宏三、矢崎芳子、川野辺泰三、宮本順子、袴田、池上香代子、北原英幸、井上公雄

以上51名

〔担当幹事〕武沢和義、戸津高保

ウトナイ湖探鳥会に参加して

1999. 3. 28 山 田 美 子

春、雪解けが進むと、我が町上空をひっきりなしにハクチョウやガンの群れが行き交い、近くの石狩川温泉の沼も、沢山の水鳥でとても賑やかになる。

鳥達の到来を待ち兼ねて、沼の辺に住む東さんと連れ立って、ここウトナイ湖まで来てしまった。

時折冬の名残りのブリザードで、前を行く車が消える。果たして探鳥会は、あるのかしら……？

ところが、湖には想像をはるかに越える水鳥の群と、すっかり真冬の装備を整えた人々の姿。鳥も人もほのぼのとしている。私達も仲間に加えて頂く。

湖畔には、ハクチョウ達の足元にびっしりと人形のようなオナガガモ。少し向こうには、ヒシクイ(?)を先頭に沢山のカモたち。昨年マイブームになったミコアイサの茶と白のツートンも見える。

突然「ホオジロガモがいるよ！」と何方かの声。私も夢中で探す。「いたッ！見つけた！逢いたかった！」逆光で黒く見えるデコボコ頭に、まーるく浮き出した真っ白い頬。早くも胸がいっぱい。こんなに白いものは他にはない。2羽がこちらを向いて羽を広げ、立ち上がる。「ん、お腹も白いんだ！」大発見に一人ニンマリ。

一寸長めの平らな嘴、なだらかな背中優雅なシルエット！ これもブームのカワアイサ？「あっピンクの嘴！」と東さんもウォッチングにはまりそう。

幹事さんの案内で、ネイチャーセンターに向けて進む道々、珍しいヨシガモや、ミコアイサなど、沢山の種類の水鳥と、対岸のオオワシを見せて頂く。お腹一杯ウトナイ湖の霞を吸い込んだ気持ち。

途中まるい樹形の冬枯れに見える木が、灰色の空に真紅に燃え上がっている。思わずたずねてみると、「これは、ハンノキ！」ととてもていねいに教えて下さる。枝先に垂れ下がった今年育った雄花を手にとると、しっとり柔らかい春の感触。小さな小さな雌花も真っ紅！

最後に、マガンとヒシクイの見分け方を教えて頂いた。帰って、空を見上げるのが楽しみになった。

ネイチャーセンターにて、バードテーブルのシマリスを“おかず”に昼食を取る。

環境ホルモンや散弾銃の鉛が、野生生物に及ぼす影響が心配されている昨今、早急に調査、研究がなされ、人間を含む地球のすべての生き物の営みが健全に保たれることを心から願っています。

〒069-0373 岩見沢市幌向3条4丁目290-13

〔記録された鳥〕カイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コバクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、ユリカモメ、コゲラ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上37種

〔参加者〕東 尚美、北村方男、渡辺好子、成澤里美、速藤尹希子、香川 稔、大賀 浩、山田美子、羽田恭子、沢部 勝、雪田昭治・久子、逸見トモ子、小野寺まゆみ、今村三枝子、栗林宏三、鷺田善幸、羽田一夫・美子、富田寿一、蒲澤鉄太郎・則子、樋口孝城、石井孝子、白田正、鈴木繁雄・英子、井川修二、北山政人、山下和子、道場 優、小野盛市、戸嶋裕子、横井澄子、村上トヨ、板田孝弘、井上公雄 以上37名

〔担当幹事〕富田寿一、井上公雄

四月の光

1999. 4. 11 村田 静 穂

うすぐわりの寒い日が続いていたが、この日は快晴であった。街中の雪は解けてしまったが、森林公園はまだ雪深い。集まった愛鳥家たちも、樹木たちも春の陽光を浴びて嬉々としている。

固雪を踏みしめ、五分ほど歩いたころだ。木々の間から抜ける空を見あげると、一羽の鳥が回旋しながらゆっくりと下降してくる。まわりから「あっ、ノスリだ！」という声がとんだ。青い空にくっきりと映る白いノスリの飛翔。私も一緒に空を飛んでいる気分になる。

カラ類やヒヨドリ達の囀りを聴きながら、大沢池の方角へ歩を進める。木々の根元の回りは雪が消えて黒いほら穴になっている。あたりの残雪は丸みをおび、白い丘陵が点在しているようだ。それらは白と黒の抽象画の景観であった。南斜面の堤は少しばかり雪がとけていた。福寿草が三輪、光に向かって咲いている。光沢のある黄色の花びらをいっぱい広げて。その姿は春を待ちこがれ、歓喜の笑いにあふれているようにもみえた。

池はまだ一面凍っているが、ところどころの湿地はたっぷりの水量を含んでいる。水藻と光の粒はキラキラとゆれ、拳大ほどの座禅草と水芭蕉が芽吹いていた。

そんな風景のなかを進むうち、誰かがキバシリをみつけた。私にはとても見つけることのできない鳥だ。木肌と同じ色で樹木に吸いついたようにして螺旋状にすばやく走るから。姿は地味だが歌がうまい。甘い声でその旋律は笛をきいているようだ。この日は二、三箇所での鳥に出会えた。

やわらかな風が心地よく通り過ぎてゆく。

昼食を終え帰りの森で、あたりの空気を包みこんでしまうほどの「グチュグチュ」「ザワザワ」という響きがどこからか湧いてきた。みんなは双眼鏡をのぞき、息をひそめ耳をすます。中の一人が「マヒワの大群よ！」と叫んだ。そこは私たちのいる歩道の左向こうの沢。葉をおとした一本の桂の大木であった。枝々から無数のトリたちがこぼれるように舞いおり、雪面をツツツと歩いている。スズメ大ほどのマヒワは深緑色と黄色の背を丸め、種子をついばんでいた。

そのあたりは木々が繁って暗いが、マヒワたちのいる大木の下だけは光が射して明るかった。一生懸命生きている姿に私は感動する。その場に三十分ほどもいたであろうか。私たちが光に包まれているような神秘的な気分であった。

光あふれる森は春の序曲でもあった。

他にも、カケスがねずみをくわえ樹上でひきちぎっては食べている光景や、オオアカゲラがあつと黒のストライプ模様のスーツと赤パンツの手入れを入念にしている姿が見られた。

〒064-0916 札幌市中央区南16条西8丁目2-37

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、オシドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、ミソサザイ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、

ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、ニユウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上28種

〔参加者〕鈴木繁雄・英子、松原寛直・敏子、高栗 勇、橋本翠柚、蒲澤鉄太郎・則子、広木栄三・朋子、栗林宏三、三船喜克・幸子、難波茂雄、速藤尹希子、勝俣征也、戸津高保・以知子、山田良造、樋口孝城、佐々木潤子、武沢和義、後藤義民、村田静穂、板田孝弘、吉田慶子、堂向 隆・洋美、坂口秀子、井川修二、村上トキ、沢田浩一、香川 稔、中川新一、井上公雄 以上35名
〔担当幹事〕三船幸子、後藤義民



【福 移】 平成11年7月4日(日)

殆どの鳥の繁殖のシーズンも終息の時期に入り、巣立って間もない幼鳥も、一人立ちに向かって健気な姿を見せています。此処、福移の牧草地・堤防河川敷地での探鳥会は、真夏に向かって今年前半の山野、草原性の鳥の観察に一区切りになる会になります。

大規模な堤防河川敷改修のため、河畔林の伐採整地などの改修工事のため、野鳥の生息環境が大きく変化、探鳥地としての存在が危ぶまれた時期もありましたが、一部河畔林と周辺牧草地に大きな変化がなかったことが幸いし、今では、札幌市内では数少ない貴重な探鳥地になっています。減少傾向の著しいシマアオジの繁殖が最近確認され、保護区域に指定されるなど、環境の保全が野鳥の生息に重要であることが理解されつつあります。

めっきり少なくなったカッコウや、草原野性のシマアオジ、オオジュリン、ノビタキ、ベニマシコ、オオヨシキリ、コヨシキリ、モズ、アリスイ、石狩川岸の土手にコロニーを営むショウドウツバメや、イワツバメ、カワセミ、牧草の刈り取り跡ではウズラなど、昨年は到るところでノゴマが見られ、35種が記録されています。

集合＝8時40分 市営バス福移入口停留所付近
交通＝地下鉄東豊線環状通東駅より、市営バス北札幌線福移入口下車

【鶴 川】 平成11年8月22日(日)、9月5日(日)

全国的にもシギ・チドリ類の重要な飛来生息地としての干潟の減少傾向が、憂慮されています。本道では、春秋の渡りの中継地としてシギ・チドリが立ち寄る干潟は

少なく、その中で鶴川は貴重な中継地として重要視され、かつては多くのシギ・チドリ類で賑わった時もありました。

時代が平成に変わって間もなく、鶴川河口付近の湿地に淀む生活排水を海へ流す導水路を掘削しました。

以来、付近一帯の乾燥化が進み、シギ・チドリ類の採餌場となっていた小沼地や、湿地が消滅、その後の出水による河口流域の変化や、海岸線の自然浸食の進行などの環境変化で、シギ・チドリ類の飛来、寄留数が減少しています。

こうした実情を憂慮した地元の自然愛好家グループの有志が集い、自然観察会や鳥類の観察調査記録などを積み重ねながら、町や開発局などに働きかけ、鶴川の自然環境の回復に向け、地道な努力が続けられています。

季節は夏から初秋へと変わり、ユーラシア大陸の高緯度の極北地での繁殖を終え、南の越冬地へ向かうシギ・チドリ類の観察シーズンです。

河口海岸、干潟、後背湿地などが、彼らの採餌休息の場。ムナグロ、ダイゼン、コチドリ、メダイチドリ、オグロシギ、アオアシシギなどのシギ・チドリ類をはじめ、スリムな姿態のアオサギやカワセミの他、チュウビ、オオタカ、アジサシなど25種前後が記録されている所です。

集合＝9時30分 J R日高線鶴川駅前

交通＝道南バス（浦河行）札幌駅前バスターミナル発
8時。鶴川駅前通（農協前）下車徒歩約5分

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成11年7月11日(日)、9月12日(日)

集合＝午前9時 大沢口駐車場入口

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。
☆交通機関をご利用の方は、各自で調査、再確認をお願いいたします。

☆昼食、観察用具、筆記用具をご用意願います。

☆探鳥会の問い合わせは 011-866-1525 井上宅まで

【お知らせ】

「探鳥会報告」の宮島沼探鳥会と野幌森林公園探鳥会の原稿については、誌面の都合で次号に掲載しますので、よろしくお願い致します。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

☎060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465